

真剣で私に恋しなさい
Z! ~Super Saiyan~

泣きっ面

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある世界のある惑星で帝王との激闘に勝利した超戦士。そんな超戦士の物語――
タイトル変更！

目次

サイヤ人編

第1話：もう一つの世界	1
第2話：金色の戦士	7
第3話：悟空と義経と出会い	15
第4話：動き出した運命	29

サイヤ人編

第1話：もう一つの世界

「……………は……………どこだ……………」

超戦士は動揺していた。さっきまで居た場所とは違う景色が目の前に広がっていたからだ。その景色は明らかに自分が先程まで居た場所とは異なっていた。顔を下に向ければ大きなビルや町が広がっていた。

「……………オレは……………さっきまでナメツク星にいたはず……………なぜだ……………ここは地球なのか……………でも、他の奴らの気を感じねえ」

超戦士は動揺した心をゆっくりと鎮め始めた。そして、自分が置かれた状況を整理し

始めた。ナメック星の爆発寸前、もう助からないと目を瞑り、拳を握り締め、力の限り叫んだ。その後、目を開けばこの景色が広がっていた。

「そうか……界王様がオレの事まで」

超戦士は気づいた。自分をここに飛ばしてくれた張本人の存在に……界王はナメック星の最長老に超戦士の願いを伝えた。超戦士の願いとは……《自分とフリーザを除いた全ての人を地球に移動させる事》だったが、界王は時間差を利用して超戦士も助かるよう神龍に条件を付けたのだ。

「……すまねえ……最後まで迷惑かけちまって」

心と身体を冷静に落ち着かせた後、状況を全て理解した超戦士の変身は解けてしまった。その黄金色の髪は力を失ったかのように黒くなり、荒々しかった姿は見る影もなくなっていた。上半身の服はほとんど無くなっており、下半身の服は所々破れていた。そして、体中には凄まじい程の切り傷や打撲などがあつた。

「落ち込んでる暇はねえ。まず、ここがどこかかんねえとな……それに夜みてえだし。できれば服も欲しいな」

しばらく浮いたままじっとしていた超戦士は、疲れきった表情で町の方へと降りていった。

その世界が自分の居た世界と全く異なる世界だという事を知らずに……

その頃、某時刻、某場所では――

「大和！残りの敵はどこなの!？」

赤い髪をしたポニーテイルの女の子が叫ぶ。川神一子……皆からは「ワン子」と呼ばれている。幼いころ孤児院より川神市在住の老婆に引取られる。老婆亡き後、川神院に

養子として引取られる。単純明快で元氣澆刺、将来百代を補佐できる師範代を目指し修行中の女の子である。

「今、探してる！もう少し待ってくれ」

直江大和……力は無いが勝利のためには手段を問わない頭脳派、学年だけでなく様々な所に顔がきく百代と幼い頃舎弟契約を結んでおり互いに姉、弟と呼び合う両親は海外在住。

「ここには居ないぞー！大和ー！」

レイピアを持つ女騎士。クリスティアーネ・フリードリヒ……通称「クリス」と呼ばれる女の子。ドイツからの交換留学生真面目で融通が利かず人を疑うことを知らない。プライド高く負けず嫌いで一子とよく張り合い策を弄する大和とはしばしば対立する。軍人の家系に生まれ軍人である父親を敬愛しいずれ同じ道を歩むことを夢としている。

「くそッ！一体何処にいるんだー！」

「まさか、敵があそこまで手練揃いとは思いませんでしたな」

そこでは男達が話し合っていた。一人は眼つきが鋭い筋肉質の体型をした男と、もう一人は対照的な身体をした男の二人組だ。

「ああ……十勇士が壊滅だからな……俺一人であの阿呆共を何とかしてもよいが」

「い、いけません！アレを使うのは身体にかかる負担が大きすぎます！」

「ふッ安心しろ……このスポットは俺の様な小狡い保身に長けた男でなければ見つけれまいよ。無論、他にも色々兼ね備えてあるがな。」

「……………おい……」

そんな時だった。突然、男二人の後ろから明らかに自分達の仲間の声じゃない聞き覚えの無い声が聞こえてきた。

「聞きてえ事があるんだけどよ。ちよつといいいか？」

第2話：金色の戦士

20XX年 X月 X日……場所、川神市工場地帯……この場所である決闘が行われていた。それは数日前、福岡という町の天神館という学校が週末、この川神に修学旅行で訪れるとのことだった。その時、この川神学園と学校ぐるみでの決闘を申し込まれ、川神学園の学園長である、川神鉄心がその申し出を受け入れたのだった。

「……というこじや」

「この戦いを、そうじゃの。東西交流戦と名付けようかの……激しい戦いになるぞ」

全校朝礼でこれを聞かされた生徒達の内心は……

(しれっと、とんでもない事いうなよ！)

……と心一つにそう思ったそうだ。当然、乗り気ではない者も中にはいた事だろ

う。また逆にこの話を聞いた生徒の中の数名は笑みを浮かべ、目をギラギラと輝かせる者までいた。

「ねえ、大和……天神館ってどういう学校なの？」

学園長の話の中、川神一子が後ろから不意に質問をぶつけてきた。それを聞いた大和は呆れ果てた様な顔をしていた。

「そんな事も知らなかったのか？ ワン子」

「あ、あはは……その………てへっ♡」

自分の知識の無さを改めて思い知らされた彼女はまるで誤摩化すかの様にかわいこぶってみたが

「後で、お仕置きな」

大和には通じなかったようだ。そんな日常的に繰り返されるやり取りを交わしながら大和は彼女の不意の質問に答えてみせた。

「天神館っていうとバリバリの武闘派が揃っているって所でかなり有名なところだよ。と言っても姉さん程じゃないがな」

大和が自慢げに話す姉、川神百代……武術の総本山、川神院の跡取り娘であり、陽気で鷹揚、頼りがいがあるので全校生徒の皆に慕われている存在でもある。しかし、その圧倒的な戦闘力から常に強者に飢えており暇な時は舎弟である大和をからかって遊ん

でいる。そんな彼女の實力は世界中にも知れ渡っており、知る人ぞ知る《武神》という肩書きを背負っている。

「へえ、そんなにすごいんだ。アタシ、知らなかったわよ。大和」

「まあ、東高西低って言われてるぐらいだから……今回の決闘も恐らくそれに納得できない好戦的な連中が挑んできたんじゃないのかな」

「だが大和、楽しい旅行の時間を決闘に使うとは、自分はどうかと思うぞ」

「あつちが決めたんだ。俺たちは受けるだけさ、クリス。それに姉さんも喜ぶし」

そんな話をしていると朝礼台に立つ鉄心が皆に決闘の場所とルールを告げてきた。

「夜、川神の工場で学年ごとに二百人を出し合い集団合戦！敵大将を倒せば勝ち。ルール無用の実戦形式じゃ。戦闘が終わった学年は他の学年に助っ人として加勢してもよいからの……」

こうして無人の工場地帯をステージとした戦が始まったのである。

「どこにも敵が居ない。一体どこに隠れているんだ!……んツ?」

軍師、直江大和はもちまえの頭脳で敵の大將がどこに隠れているのかを懸命に探し出そうとしていたが

(電話?……クリスからか)

ピッ

「クリスか!敵大將は居たのか!」

「大和、今、敵最前線にいるんだが敵の大將が何処にもいないぞ!」

そう簡単にはいかなかったようだ。仲間からの知らせを聞いた大和はクリス、ワン子、京などの《風間ファミリー》に引き続き敵大將の居所を探るように指示を出した。

「思った以上にあちらさんもやるみたいだな。この工場地帯のどこかに……一体、何処に隠れているんだ」

大和はもう一度一から考え直す事にした。敵の位置をより正確に把握し一気にこの勝負を決めるために、そんな軍師、大和でも見つけられない敵を……超戦士は見つけてしまったのだった。

「なあ、ちよつと聞きてえ事があるんだけどよ……いいか？」

超戦士は、その二人組の男達に近づき話しかけた。

「!?」

「なにや……つ……」

「ふッ、ここが分かるとはな貴様、なにも……の……だ……」

男二人は声が聞こえてきた方向を横目で見るように振り返った。しかし、次の瞬間、男達は絶句してしまう。何故なら今、自分達の目の前に立っている超戦士の傷だらけの摩訶不思議な姿に思考すら停止しかけていたのだから。

「いや、悪りいんだけどよ。ここが何処なのか教えてくんねえか？」

「オラ、ここに来たばつかりですよ。ここが何処なのかよく分かんねえんだ。ここは、地球のどこからへん何だ？」

超戦士は言った。今、自分が一番聞きたい事を、その答えを求めて……しかし、目の前の男達に超戦士の言葉など届いておらず、男達は超戦士の格好の方に気を取られていた。そして直ぐさまそのうちの一人が超戦士に向かって言葉を投げかけた。

「き、貴様！何だその姿は！」

「え……ああ！これか。まあ、色々あつてよ。気にしねえでくれ」

超戦士は平然と男達に大丈夫と言わんばかりに笑つて言つてみせたが、それを聞いた男は——

「で、できる訳ないだろ！」

と、言葉を発すると同時、筋肉質の男が武器を手に超戦士の懐まで一気に間を詰めた。しかし——

ドサツ——

「し、島?」

島と呼ばれるその男は、自信の武器で超戦士の頭めがけて全力で振り下ろしたが、突然、白目を剥き流れる様に倒れ気絶してしまった。その後、超戦士がその島と呼ばれる男に近づき心配する様に言った。

「す、すまねえ! オラ、め、めちやくちや加減したんだけど、ち、力がまたつき過ぎちまつたみてえだ! ……わ、悪りいな……」

残されたもう一人の男、石田は何があつたのか感じる事も見る事もできず啞然としていたが、超戦士の言葉を聞き我に返った。そして、直ぐさま自分の武器に手をかけ構えながら超戦士を睨みつけた。

「き、貴様がやったのか! こ、答えろ!」

「い、いや! 悪気は無かつたんだ! ただ、ちよつと力がよ!」

「それに貴様! その身体! 明らかに戦闘によつてできたものだな! この俺の目は誤摩化せんぞ! 相당한腕と見たぞ! 東にこれ程の強者がいようとは、川神百代だけでは無かつたという事か!」

「か、かわかみ……ももよ? お、おめえ、さつきから何か勘違いしてねえか?」

「ええい! 黙れ!!」

もはや言葉など無意味。目の前の男に仲間をやられた石田は昂ぶる怒りに身を任せ、仲間の仇を取るため隠していた力を解放した。

「もういい……貴様に見せてやるぞ！俺の力を！」

「光栄に思え！これが、西方十勇士の怒り！その真の姿だ！ぬああああああ！」

石田という男の気がどんどん強くなっていく。さらには、石田の黒髪が金色へと変化する。それはまるでここに来た時の超戦士の姿の様に……

その技の名は——

「奥義・光龍覚醒!!」

第3話：悟空と義経と出会い

「驚れえたな……まさかオラと同じ様な事ができるなんてな」

自身の変身とは違うが、確かにそれは似ていた。

特徴的な変わり様……気が増え威圧的になり、さらに感情が昂っている所を見るとやっぱりオラがナメック星で成った変身にそっくりだな。でも……気づいてねえんか？

「貴様も知っているとと思うが西では女より男が強い。そして覚醒した俺に敵はない！」
「そうなんか？……でもここに集まつてる沢山の気の中でもそんなに強いとは思わないけどな」

石田の実力は十勇士最強で間違いない。だが今現在この場所で行われている東西交流戦において一番に強いという訳ではない。何故なら今この場所には石田以上の実力を秘めている者達がいるからだ。

川神百代を除けば……剣聖黛十一段の娘である黛由紀江だろう。彼女は川神百代と渡り合える数少ない人物の一人である。

その他にも石田に近い実力かそれ以上を持った者達が数名、この東西交流戦に参加している。

「貴様……今この俺を弱いと言ったな！」

「ああ、それにおめえのその奥義つちゆやつはかなり身体に無理させてるみてえだしな」
石田は目の前にいる男の口から自身の技の弱点をすぐに見抜かれてしまった。その言葉に思わず虚を突かれた様に驚く石田の顔には焦りが見え、その瞳は揺れていた。自身の口からではなく敵対する男の口から言われたのだから当たり前だと言えるだろう。

だが、その男の言葉が石田に怒りを忘れさせ冷静にさせてしまった。

(……)この男、一目見ただけでこの奥義が俺の寿命を減らしている事に気がつくとは
(それに俺の家臣である島を一瞬で倒すとは、島は西ではそれなりの実力を持っている男だぞ)

並の使い手ならば攻撃時の動きで何をしたのかを視認し感じ取る事ができるのだが、この男は違った。闘気はおろか気に変化は無く島が倒れた後、この男の右腕だけが身体の前に突き出ていた。

拳の形でも手刀の形でもない。ただ何かに触れようとした手の形だった。まさか触れただけで倒したというのか？

色々な疑問が石田の頭に浮かぶ。この男は謎が多すぎる。下手に攻撃するよりまずはこの男についてある程度知る必要があるな。島の仇はその後に討てばいい。

「おい！貴様いくつか質問する。俺の問いに答えろ！」

石田は鬨気を見せずただ目の前に立っている男に質問をぶつける。しかし、石田の鋭い目はその男の些細な動きを見逃さない様にしていた。この男が質問の最中に攻撃を仕掛けてきても迎撃できる様にするためである。

「ああ……オラも聞きてえ事があつたんだ。いいぞ」

「……まず、一つ目。何故、そんなに傷だらけなんだ……」

当然の疑問だ。いきなり目の前に現れた男が既に満身創痍の状態で立っていた。例え赤の他人だったとしてもその経緯を聞くのは自然と言えるだろう。何より一体、誰にそこまで痛めつけられたのか気になるという所だ。

「ああ……オラはさつきまで戦つてたんだ」

「……そうか」

なるほどな……この男の身体の傷はその戦闘でできたものか。正直……惨いな斬り傷に打撲によつてできた痣、加えて身体の所々が焼かれた様な痕がある。

寧ろ、この男の身体で傷ついていない所を探したいぐらいだ。はつきり言つてそんな箇所は無いだろう。

この男の言葉をきつかけに数多くの疑問が次々と浮かんできてしまう。謎が謎を呼ぶとはこの事だろう。これでは埒が明かない。石田は次の質問をぶつけてきた。

「貴様……名は何と言う」

それはこの男の名前だった。もし武道家であればそこそこの名が通っているかもしれない。名前が分かればこの世界では大凡の見当がつくからだ。この男が着ている服は明らかに道着だと思われる。先程この男が言った戦いというやつでぼろぼろになったであろう道着。

辺りは暗く俺が放つ光でも確かな色は分からなかったが、恐らく山吹色であろうズボンにそれを縛る黒い…いや紺色の帯。こちらも僅かに残っている紺色のシャツとリストバンド。復元したらなんて度派手な道着になる事だろう。大体そんな道着を着ている武道家は俺の記憶には無い…

さらに何だあの髪型は、突っ込みどころが多い奴だな。そんな事を思いながら俺は目の前の男の返答を待った。

「そういえば、まだ名前言ってなかったな。オラの名前は…ん？」

名乗り上げようとした時、強い気が近づいてくるのを感じ取った。気で相手の位置を把握しその姿を視界に捉える超戦士。抜刀した刀を手に持ち工場の壁を垂直に駆け下りながらこちらへ向かってくる少女が一人。

「何者だッ!？」

少し遅れを取りながらも近づいてくる者に気づいた石田。しかし遅かった。

「源義経！推参ッ！」

振り向くと同時、義経を名乗る少女の一閃が石田の身体を通り抜ける。そして、その攻撃は側に居た超戦士にも襲いかかる。

「ぐッ…はあ…」

ドサッー

「ふう…」

義経は小さく息を吐き呼吸を整えた。彼女の揺れていた前髪はまるで終わりを告げたかの様にゆっくりとその揺れを止める。

殆どが不意打ちに近い義経の一撃を受けた石田は倒れてしまった。だがこの時、義経は異変に気がついた。その異変とは倒した直後に起こる筈の音だった。時間にして3秒待ったであろうか…しかしその音は聞こえてこなかった。本来ならば先程の石田の

様に……聞こえた筈なのだ……

（あ、あれ……義経は二人……斬り捨てた筈なのだが……何故一つだけしか聞こえないんだ？）
義経自身もその疑問が頭から離れなかった。その答えは後ろを振り向けば分かるだろう。彼女もそう考え後ろを向こうとした。その時、彼女の行動より早くその答えは返ってきた。

「おめえくひどい奴だな……いきなり後ろから襲うなんてよ」

「なツ……なんで……ツ！」

そう……その男は立っていた。重傷の身体をこちらに向けその視線は義経を捉えていたがその瞳は敵意に満ちてはいなかった。その手には折れた刀の刀身が掴まれていた。それが一体誰の物なのか義経は理解した。

刀の柄から鏢に視線を送るそしてその視線は刀の反りで止まってしまった。否そこで終わっていたのだ。義経の刀は反りから上が無くなっていったのだ。

「そ……そんな……薄緑が折られるなんて」

「あツ！すツすまねえな。やっぱりオラ力がつきすぎちまったみてえなんだ。これ返すぞ」

この時……ただ一つだけ理解できたのはこれ以上この男に刃を向けるのは危険だという事を本能的に察知してしまったという事だ。

「クリステイアーネ・フリードリヒ!!推参、敵大将!覚悟ツ!……あれ?」

遅れて敵大将の場所までやって来たクリス。その後から風間ファミリー達、さらには後方からはS組が来た。ヒーローは遅れてやって来ると言うが遅かったようだ。既に壊滅状態と言ってもよい西軍。副将である島と大将である石田は気を失い地面に倒れていた。

「やッ大和!これはどういう事なのだ!既に倒されているではないか!」

「お、俺に当たるなよ!これでも速く探した方なんだぞ」

大和の服を掴み喰ってかかるクリス。少し暴れ足りなかったのかその顔には苛立が見える。それもその筈、殆どの敵は京にワン子、そしてS組に所属するマルギツテや忍足あずみが片付けてしまったのだから。

「いいい、一体これはどういう事なのでしょうか」

まゆっちの学年は俺達と違い一つ下の一年生。どうやらまゆっちの方は早く終わり

急いで駆けつけて来てくれた。後輩に先を越されるとは先輩として少し情けない話だ。しかし闘いが終わったばかりのまゆつちに負担は掛けさせたくない。とりあえず、まゆつちには俺達の大将である委員長の護衛を頼んでいた。

『クリ吉くおめえは良いよなあ闘つてたしよ！途中から来たオラとまゆつちなんて力カシみたいにただ立ってただけだったんだぜ！ええッおおう！こらあ！』

ちなみに今、喋つてたのがまゆつちの相棒であり我がファミリーのマスコットの存在になりつつある松風と呼ばれる手作りストラップだ。まゆつちの設定としては、寂しいまゆつちの元に九十九神が現れストラップに命を宿し、それから自分の相談相手として活躍するというシチュエーションらしい。そういう設定なのね、と納得すると設定じゃないと珍しく言い返してくるのだがどう見ても腹話術。それもかなりレベルの高い域まで達している。いつか松風が彼女にとってお役ご免となる日が来るのを祈るばかりだ。

……というよりこれ程感情がむき出しになっているところを見るとやはり相当ストレスが溜まっていたのだらう。いつもより迫力があるな。それに交流戦の途中からまゆつちの様子が明らかに変だったし明日ぐらいに聞いてみるか、今はやめといた方が良いだらうし。

(ていうか、本当に怖いな今日の松風は……)

(きよ、今日はなんか怖いな…)

と大和とクリスは心の中で同じ様な事を考えていた。

「ところで大和…一体、誰が倒したのかな?」

突然、内輪揉めの最中に京が当然の疑問を皆にぶつけてきた。確かに一番の疑問である。俺達がここに着いたのはついさっきだ…それにこうやって皆揃って来たんだ。俺たちの中で敵大将を倒せる筈が無いのだ。

「確かに、ここに来たのは今さっきだしな。俺たちが闘っている最中に他の誰かが倒したのかも考えるのが普通だよな…念のために聞くけどS組が倒したのか?」

大和はS組のメンバーに問いかけたが返って来た答えは予想していた答えと一緒にだった。

「いえ…私達ではありませんよ。こうして大和君達について来たのですから分かっている筈です」

「それにもし私達が先に倒していたなら既に勝鬨を上げてますよ」

S組の知将である葵冬馬が大和の質問に答えた。「それもそうだな」と大和自身も溜め息混じりで返してみせたがやはり誰が倒したのかまで分からなかったが、答えは意外な人物から聞く事ができた。

「フハハハハ!その疑問は我が解いてやろう!直江大和!」

その声の主はS組に所属するリーダー的存在で九鬼財閥の御曹司であり姉と妹を持つ九鬼英雄のものだった。周りからは超絶俺様主義者と言われている。そうだな後とはとりあえず服装が派手だ…というよりやる事成す事が派手すぎる奴だ。九鬼財閥と言えば世界有数の大企業でその技術は最先端と言っても良い。何故か俺の事は一目置いてる感じだ。

「おい九鬼英雄。何か知っているのか？」

「ふんッ今から説明するわ……先程、我の方に連絡が入った『武士道プランの申し子』がこの交流戦に参加するとな。恐らく義経あたりがやったんだろうな」

「『武士道プラン？』」

「『義経!?!』」

工場地帯に大和達の声が揃って木霊した瞬間であった。

工場地帯から離れたとある場所

「わ、悪い事をした。義経は深く反省している…まさか交流戦と関係ない者が居たなんて…しきりに反省している。それに後ろから攻撃した事についても反省する…武士として恥ずかしい限りだ」

そこには土下座をする義経の姿とそれを見下ろす超戦士の姿があつた。第三者が見たら誤解されるだろうが今は夜中で人通りもない。もし見られたら即通報されるだろう。ここに来た理由としては部外者を安全な所に避難させる為である。もちろんこれ以上義経と同じ様に敵と誤認して彼が被害に遭わない様にする為でもあつた。

「いやオラも偶然あそこに居た訳だしな。さっきの奴も置いて来て悪いと思つたけど…それにおめえの刀を壊しちまつたし。とりあえず頭を上げてくれねえか？」

「…うう…こんな格好を弁慶や与一が見たらなんて言われるか…」

暫くして落ち着きを取り戻した義経に超戦士は自分の名を伝えた。名前を聞いた義経は一瞬、時が止まつたかの様に固まつてしまつたがすぐに正気を取り戻した。

「そ…孫悟空さんか…そ…それがあなたの名前なのか？」

「ああ…そうだぞ？」

（名前が一緒だから誰が聞いても西遊記の孫悟空と思つてしまふだろうな…義経の気のせいと思うのだが…）

「それよりも悟空さん…気になっていたのだが相当ひどい怪我をしているじゃないか。大丈夫なのか？さつきから平然としているが義経は心配だ！」

「ん…ああ…大丈夫だ…ぞ…これ…くらい…」

義経と話たせいか緊張の糸が切れ溜まっていたダメージが一気に吹き出し膝から崩れ落ちる悟空の身体はそのまま義経に預ける様に倒れてしまった。

「さ…さつきまで平気だったんだけどな…ちよつとまづいかな…」

「全然大丈夫じゃ無いではないか！」

目の前で倒れた悟空を見てさつきまで落ち着いていた義経は再び混乱してしまった。やはり相当酷いダメージを受けている様だ。もしかしてこのまま死んでしまうんじゃないのかと義経は考えてしまった。

「ど、どうしよう！ええつとだツ誰かいのか！助けてくれ！」

しかし、辺りには誰もおらず義経の叫びだけが空しく響き消えていった。だが、幸いにもこの近くにある大きな病院が目に入った。義経は気絶した悟空を背に乗せ急いで病院まで向かう事にした。

「よしッあの病院まで行けば！何とか…なる…お…重いな。だが義経は負けないぞッ弁慶〜与一！」

悟空を背負い目的地まで行く義経。途中で横断歩道に何度も捕まってしまい車の通

りも無く急いでいた為、無視して行こうか何度も悩んでしまった事は彼女の小さな秘密である。

第4話：動き出した運命

ある日、突然この葵紋病院にやって来た一人の患者。この患者はちよつとした変わり者で医師や看護師、そして他の患者達の中ではちよつとした噂になっている。元々、この患者は別の病院からこの葵紋病院に移って来たと言う話だ。さらには何とあの九鬼財閥とも関わりがあるらしく九鬼の関係者と一人の女の子が見舞いに来ている所も目撃されている。

さらに不思議な事にその患者には身寄りがおらず、しかも名前がこれまた珍しいので病院内で彼を知らない人はいないだろう。とまあこれは良い点？でその患者が嫌でも目立っている事を表していた。もちろん悪い点もある。主に看護師や医師にとつてだとその時、後ろから声が聞こえてきた。

「看護師さん、こんにちは」

「あら、貴方が義経ちゃんねー！こんにちは……お見舞い？」

「はいーそうです」

元氣よく返事を返す一人の女の子。テレビや新聞で取り上げられていた『武士道プラン』と言う計画によって生み出された人間。その元となった偉人、源義経のクローンで

ある。武士道プランについて詳しい事は分からないが何でもこの川神の学生達と切磋琢磨していく為だとか？

「そう…本当に大変ね…あら？弁慶ちゃんに与一君もお見舞いかしら？」

「お見舞いと言うより主の付き添いだね。帰ってくるのが遅くなるみたいだし警護も兼ねてね」

義経と同じクローン人間。しかもその元となった偉人はあの武蔵坊弁慶だと言う。弁慶と言えば屈強な大男と言った感じなのだがこの子は性別からして違うようだ。癖のある黒髪は艶がありその髪は背中まで伸びている。それに加え顔立ちも良く色っぽい女性なので殆どの男子は食いつくだろう。

「俺は強制連行だ。帰ろうとしたら捕まった。大体、姉御も姉御だ。義経だって子供じゃないんだ。それに見ず知らずの人間を見舞いするほど俺は馬鹿じゃない」

「ううう……」

「与一い…公衆の面前で主に恥をかかせるとはな…後で源氏式部・プラトンの刑だ」「冗談じゃねえ…やってられるか！」

那須与一のクローン。中性的なイケメンの部類に入りモテる筈なのだが何故か私は彼が好きになれなかった。弁慶ちゃんが言うには中二病を拗らせているらしい。残念系のイケメンといったところだろう。

「待て！与一逃げるな！」

病院から逃げる与一。その後を追う弁慶。二人の姿は一瞬にして遠くに消えてしまった。仲が良いのか悪いのか分からない。

「べ、弁慶、与一！どこに行くんだ！」

取り残された義経は困った顔を浮かべながらその場に突っ立っていた。それを見た看護師は笑みを浮かべながら義経を先導しようとした。

「じゃ、義経ちゃん。行きましようか」

「う、うむ」

心配する義経の少し先を会話をしながら歩く二人。出会った患者に一人ずつ挨拶していく義経は患者にとって天使の様な存在と成っていた。初めて会った人にも優しく真面目な性格の彼女は心身ともに疲れきった患者達に癒しを与えた。

暫くして義経の見舞い患者の部屋の近くまで来た。そう……この部屋こそ先程言った“例”の患者の部屋だったのだ。その部屋の扉の前まで来た二人。ふと部屋から患者の声が聞こえて来た。

「……998……999……1000つと！」

その声を聞いた看護師は溜め息と一緒に『またか』と小さく呟いた。そうこれがこの患者の悪い点である。義経は不思議そうな顔をしながら看護師の横顔を見る。

「もおくまたやつてるんですか?……悟空さん」

扉を開き悟空に注意する看護師。後ろから義経も驚いた様な顔をしている。

「お?看護師さん。また見つかつちまったか……へへッ」

「ご、悟空さん。何をしているんだ!」

悟空は鼻で笑いながら看護師とのお約束を済ませる。義経は足速で悟空の近くまで行き身体を支えながら患者用のベットに座らせる。

「いや〜じつとしてられなくてよ。身体鍛えてたんだ。でも毎回注意されてよおオラまいつてんだ」

「駄目に決まっています!悟空さんは患者で絶対安静です。とりあえず義経ちゃん私は替えのシーツとつてくるから後はお願いね」

「うむ、義経に任せてくれ!」

看護師は義経と悟空をその場に残し部屋から出て行く、入れ替わりに弁慶と与一が部屋に入つて来た。与一は引きずられ死にかけていた。

「ほら、自分で歩きな与一」

「く、苦しい姉御!!首ッ首が!」

悟空はただ呆然とその光景を眺めているだけだった。悟空の近くにいた義経は慌て

て与一の側に駆け寄る。

「ん？おめえの知り合いなんか？」

同じ制服を着ているところを見ると一番最初にそう思ってしまうだろう。義経は悟空のその一言で意識的に反応する。

「そうだった！悟空さん紹介する。こつちが弁慶で、こつちが与一だ。義経達は同じ川神学園に通っている生徒なんだ」

「オラ、孫悟空だ。よろしくな」

「どうも……一応、武蔵坊弁慶らしいです。よろしく」

「らしい？おめえ自分の事が分からねえんか？」

「別にそう言う事じゃないんだけどね。私達クローンだから。孫悟空なんて名前も私達からすればかなり変わってるんだけどね」

「そうなんか？オラの仲間はそんな事無かったぞ。それよりクローンって何だ？もしかしてそつちの奴もか？」

「……」

仏頂面をこれでもかと言うくらい表現した与一の顔は言葉より理解しやすかった。それを見た義経は何とかフォローを入れようとした。

「す、すまない悟空さん。与一は昔から照れ屋なんだ。難しい所もあるけど根はいい奴

なんだ！」

そんな義経のフオローも空しく与一はありつただけの皮肉をまき散らした。

「はつくだらねえ。何時の話しをしてんだよ優等生。大体、どこが怪我人だよ。既に治つてるみたいじゃねーか。付き合わされた俺の身にもなれよな、時間の無駄だ。帰ろうぜ姉御！」

その瞬間、与一の身体は窓ガラスに向かって一直線に弾け飛んだ。飛ばした張本人は川神水を片手に義経の頭を撫でていた。後で看護師さん達に怒られるのは時間の問題だろう。

「帰るんだつたらその出口から一人で帰りな与一」

「わわわ、確かに与一も悪いが弁慶も少しやり過ぎなんじゃ」

「ふふつ義経は本当に甘いな……まあ、そこが魅力なんだが。それにすまないねこの部屋で騒いじゃって」

「いや、気にしてねえぞ。それにしてもおめえやつぱ相当強えんだな。オラもちよつと驚いたぞ」

「それよりもさつき言つてたクローンが何なのか教えてくれよ」

「そうだったね。義経が説明してあげなよ。私は与一を連れてくるから」

「う、うむ。頼んだぞ弁慶」

弁慶は部屋を出て行き、義経は悟空にクローンの事を説明した。そのついでに武士道プランの事や自分たちが通っている川神学園の事も順序よく説明していった。クローンや武士道プランの話よりも川神学園の話に悟空は食いついてきた。話を聞いているうちに悟空の中にある大きな想いが芽生えた。それは悟空にとつて何より大事な事だった。

「その川神学園で一番強え奴って誰なんだ？」

「え……強い人ですか？それなら多分……」

時間は過ぎ日暮れ。川神の名所、変態の橋の下では、百代がスッキリした顔でピーチジュースを飲んでいた。

「いやあ楽しかった！決闘につぐ決闘で私は満足だ」

その周囲には百代が倒したと思われる挑戦者達が修行僧の手によって次々と川神院へ搬送されていく。大和や他のメンバーもその手伝いをしている様子だった。

「放課後ずっと闘っていたのね、お姉様」

「そうだ。なんせ全国から挑戦者が来ているからな」

百代はここで義経目当ての挑戦者達をふるいにかける役目だった。これは百代が義経達と闘うため九鬼との約束事だったからだ。

「それで、姉さん。挑戦者の中で目になつた人はいる？」

「何人か腕がいいのはいたが：しばらく動けないかな。なんせあいつら本気も本気。こつちも失礼な真似はできないから、手を抜かずにいくと？」

「なるほど、大ダメージを受ける事に：」

「ねえ、大和。ギャラリーの皆は？」「帰って頂きましたよ。さつきまで大勢いましたけどね」わっ！

突然、ワン子の声を遮るように男の声が聞こえた。振り返って目視すると執事服を着

た男が立っていた。

「あまり橋で騒ぎすぎても、近隣住民の皆様には迷惑ですから」

「そののにーちゃんは、決闘がスムーズにいくように仕切ってくれたんだ」

「桐山鯉と申します。これくらいお安い御用です」

と言いつ残し、九鬼家の従者は姿を消した。と入れ替わりもう一人執事服を着た別の男が現れた。

「遠くから見ていた。嬉しそうに闘うんだなお前は……」

「実に満足です……ヒュームさんとも闘ってみたいなあ」

「ぐはっはっはっはっはっ!!……笑わせるなよ小娘!」

「なあくモモ先輩。このおっさんって朝礼のときの人だろ? 九鬼の人間なのは分かっているけどよ強いのかよ?」

岳人が百代とヒュームの間を割って入った。風間ファミリーの男達はこのヒュームと言う男が気になっている様子だった。由紀江、一子、クリスそして京はヒュームの気を肌で感じ取っていた。

「強いなんてもんじゃない……九鬼家従者部隊の零番だ」

「いいッ! まじかよ! こッこいつは驚いたぜ!」

「う、うん。この人がそうだったなんて、それに従者部隊の零番って相当なバケモノだっ

て聞くよ」

「てことは、モモ先輩より強いんじゃないかよ!」

岳人やモロそしてキャップの動揺も仕方のない事だろう。実際、百代もそうだがこのヒュームと言う男もかなり好戦的な部類に入り実力は百代以上である。そして今にも鬨いが始まりそうな雰囲気。風間ファミリィは徐々に固唾を呑んでいた。そんなファミリィとは違いヒュームは百代に向かって口を開いた。

「一つ予言をしておいてやる。いずれお前は負ける。九鬼が用意したある対戦相手によってな」

「私の対戦相手…?」

「ちよつと待ってくれ! 姉さんの対戦相手ってもしかしてアンタなのか?」

咄嗟に大和はヒュームに質問をぶつけた。大和の狙いは二つ。一つは百代とヒュームの戦闘を回避するため。もう一つは大和達の疑問を解決する為だった。百代と同程度の戦闘力を持つ者とくればそう多くはない。確信はないが片手があれば足りるぐらいだろう。当人の百代でさえこのヒュームがその対戦相手だと予想していた。

「ふん、赤子が要らぬ心配などするな。質問にはこう答えておいてやる。百代、冬までにお前が無敗だったら喜んで相手をしてやろう」

「……誰だか知らないが、楽しみですな」

「もう一つこれは忠告だ。お前の強さを支える『瞬間回復』だがな：俺の先祖初代ヘルシングは、不死身の怪物を倒した事で名を挙げているがな、不死身の怪物の正体は『瞬間回復』を使う武道家の事だ。つまり倒し方を受け継ぐ俺にお前の頼みの綱はまるつきり通じんよ」

「真に強くなりたくばあの技に頼り切るなよ」

「今日の決闘で一度も使ってませんけど？」

「戦闘に滲み出ている。回復があるから大丈夫だと。それは実に危険な考えだといつか理解するだろう」

そう言い残しヒュームはその場を颯爽と去っていった。

「聞いたか弟よ。対戦相手だとさ」

「あのヒュームとかいう人じゃないなら義経か弁慶：でもないね。あの感じからして多分、身内じゃないっぽいね。とにかく想像できないよ」

「面白い展開じゃないか。どんな相手がきても負けん！それにあのじーさんとは意地でも闘いたくなってきたしな……」

意気込む百代を見てさつきまで怯え心配していた百代の妹である一子は元気になりいつの間にか百代の隣に並んで立っていた。

「さすがお姉様ね！アタシももっと強くなるわよ!!」

「……………そうだな。よし！早速帰ってトレーニングするかワン子！」

「押忍！」

「じゃあ、俺達もそろそろ帰るか」

日は沈み、夜 川神院 稽古場。ここで先程のヒュームと川神院総代であり百代の祖父に当たる人物『川神鉄心』が居た。川神鉄心とはどんな人物かと生徒に聞いてみるとスケベなお爺ちゃんと言うだけで詳しい詳細は謎に包まれている。ただ分かる事は戦争頃から生きているとの噂でかなりの高齢だと言う事。そして実力や地位もあり威厳ある外見とは違いお茶目な性格をしている。交流戦前の全校集会を思い返せばなんと

なく想像がついてしまう。

「鉄心。川神院の門下生達を見させてもらったぞ。ついでにあの『川神一子』という赤子もな……」

「どうじゃった？ なかなかイケてるじやろ」

「……心技体ともに素晴らしい育成だ。流石は世界の川神院と言った所か」

「後世に技と心を伝えていかねばならんからのう」

「俺自身、弟子を取るにしてもせいぜい一人が限界だ。だからあまり偉そうな事も言えんが……」一つ苦言を呈する

「あの娘は川神一子武道以外の道も考えさせるべきだ。今日、実際に見て来たがはつきり言つて……」

「……武道の才能が無いかの？」

「……実力や努力は認めよう、確かに並ではない。あの娘の手に数えきれん程の血豆がいくつもあつた。だが、よくて秀才どまり天才にはなれん。それにあの子の為だ。百代もそれに気づき始めている」

「……あの子はいいい子じゃ……本当にいい子じゃ。根性もあり素直で正直じゃ。だが一子が目指す道は果てしなく険しい。お前の言う通りそろそろ一子にも自分の道を歩ませねばならぬ時期が訪れたのかもな……できる事ならばもっと早く一子に言わなければ

ならなかったのかもしれないがの」

百代の義妹である川神一子の『夢』。それは『川神院師範代』になること。師範代に成る為には血の滲む様な修行をこなし武道に全てを捧げ武道を極めた者だけに与えられる称号。まさに武道の天才^{エリート}だけがなれる夢。だが、ヒュームや鉄心が考えるように一子には師範代になれるだけの才能が無かった。叶わぬ夢を追わせ続けなければならぬのなら一子にはもつと別の道を探してくれたらと思う鉄心やヒュームのせめてもの愛情からだった。

「…ワシは今まで師範代を目指そうと努力して来た者を多く見てきた。だが、その夢に届かぬ者がほとんどじゃった。才能はあつたが怪我で二度と武道が出来ない者も少なくはなかつた。お前もよく知っておる筈じゃ。だからワシは一子にもそうなつてほしくはないんじゃないよ…」

「……………」

「……………二週間後。その時があの子の武道家としての最後の日になるかもしれないの」

「……………」

夜でも欠かさず走り込む一子の姿。三個のタイヤと自分の腰をロープで繋いでいた。ただ朝とは違い『勇往邁進』の掛け声は無かった。夜遅いと言う事もあり人様に迷惑をかけないよう声を押し殺し黙々と走り続けていた。

(お姉様とのトレーニングも終わったけど、もつと体力をつけなきゃ！)

途中、通過地点の河原を通り過ぎようとした時、川辺に人が立っている事に気がついた。

(あれ?……あそこに誰がいる?)

(こんな時間にあの人一体何してるんだろ?…それに何かしらこの感じ…)

「もうちつとだな…」ん?」

川辺には悟空がいた。夜な夜な病院を抜け出しこの河原で静かに修行をしているようだった。そんな悟空も誰かに見られている気配を感じ取っていた。修行を途中で切り上げ気配がある方へ身体を向ける。

「なあ、オラに用でもあるんか?」

「あーごめんなさい。そういうつもりじゃ無かったんだけどトレーニングしてたらちよつと気になっちゃって」

「トレーニング？……もしかしておめえ武道家なんか？」

「そうですけど……なんでアタシが武道家だつて分かつたんですか？」

「普通の奴より気がちよつとだけ強えからだ。にしても懐かしい事やつてんなあ〜」

「な、懐かしい？これがですか？それにいま氣つてもしかして貴方も？」

「ああ、オラも武道家だ。孫悟空つて言うんだよろしくな！」

「アタシは川神一子つていうの。よろしくね！」

二人は軽い自己紹介を交えた。その後、性格の相性がよかつたのか同じタイプの武道家だからなのか、もう初対面同士とは思えないほど仲を深めていた。会話の内容としては悟空が昔、自分が一子と同じように修行していた時期があつたなどである。その話をすると一子は嬉しそうにその話を聞いていた。

「へえ〜悟空君もアタシと同じトレーニングを小さい頃してたんだ。てことは……今さっきもトレーニングをしてたの？」

「ああ。ちつとばつか氣の修行をな」

「え！やつぱり悟空君は氣を使えるの!？」

「使えるぞ。けどよ、なんでそんなに驚いてんだ？おめえだつて使えるんだろ？」

「アタシはお姉様達みたいに氣を使った鬪いは苦手なのよお〜」

今にも泣きだしそうな顔をする一人の少女。悟空は一瞬どうしてよいか戸惑つてし

まったが、一子が発したあるキーワードが混乱していた悟空を正常な思考状態に戻した。

「あれ?……おめえ川神つて名前だったよな。もしかしてよ、おめえが言つてた姉ちゃんつて川神百代の事じゃねーんか?」

「そうだけど…グスツ。お姉様がどうかしたの?」

「やっぱそつか……なあ悪いんだけどよ、オラといつちよ組み手してくんねーかな?」
「組み手? いいけど怪我しちゃうわよ」

「大丈夫だつてオラも鍛えてるからよ。それにいい加減身体動かさねーと鈍っちまうからな。思いっきり来い!」

— そう言うとう悟空は立ち上がり軽い柔軟体操を始めた。一子が承していないとはいえ悟空の方は体中が気合いで満ちているようだった。そんな悟空を見て一子も自分が強くなる為の良い機会だと思つた。また同じ武道家として悟空がどういふ闘いをするのか見てみたいという好奇心もあつた。

「分かつたわ! 手加減なしの勝負ね。望む所よ!」

孫悟空と川神一子。この出会いが後に一子の武道家としての運命を大きく変えることになる。